

研究・調査報告書

分類番号	報告書番号	担当
A-141	14-080	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門
題名		
Alcohol Challenge Responses Predict Future Alcohol Use Disorder Symptoms: A 6-Year Prospective Study 飲酒負荷反応は将来の飲酒障害を予測する：6年間の前向き研究		
執筆者		
Andrea C. King, Patrick J. McNamara, Deborah S. Hasin, and Dingcai Cao		
掲載誌		
Biol Psychiatry. 2014 May 15;75(10):798-806. doi: 10.1016/j.biopsych.2013.08.001.		
キーワード		PMID
アルコール反応、暴飲、微分モデル、報酬感度、主観的効果		24094754
要旨		
目的： 過剰飲酒癖は個人のアルコールに対する反応性と関連があるかもしれない。この研究では、将来の飲酒問題にアルコール摂取反応の表現型がどのように関係するかを検討した。		
方法： 日常生活で深酒をする若い 104 人の健常人に対して、被験者内での二重盲検プラセボコントロールのアルコール負荷研究を実施し、その後、6年間フォローアップした。アルコール負荷では参加者は 0.8g/体重 1kg のアルコールもしくは、プラセボ飲料をランダム順で与え、前後で主観的な反応を調べた。フォローアップは飲酒行動やアルコール使用障害（AUD）の症状を 6年で 5回評価した。評価は、98%（520(104人×5回)回中 509回）の実施率であった。		
結果： 6年間のフォローアップを通して、アルコール負荷試験でアルコールの刺激や報酬効果（好き、もっと欲しい）に関する感受性が高く、アルコール鎮静作用の感受性の低い人は将来の AUD の頻度・程度を予測した。		
結論： 本研究は、これまでの知見を拡張し、過度の飲酒癖やアルコールの問題をおこす傾向に新たな実証的な洞察を提供した。高められたアルコールの刺激と報酬効果は、より大きな不節制飲酒頻度と長期にわたるアルコール使用障害の症状を予測した。アルコール使用障害は、飲酒障害がより異常となる進展期である 30歳代まで継続的に続いた。		